

## あとがき

本書は、日本放射線影響学会の60回大会記念事業の先行事業として編集したものです。日本放射線影響学会は、1959年の第1回学術大会の開催以来、真に学術に根ざした研究者の集団として Journal of Radiation Research という英語論文誌の発行を主宰し、これまで57回の全国規模の学術研究大会を開催してきました。2011年3月の福島第一原子力発電所事故を受けて、「今こそ研究者も社会に向き合うべき」という考えに賛同した会員有志によるQ&A活動から生まれた本書は、2年後に60回目の学術大会を迎える本学会の編集を冠して出版する初めての和文単行本でもあります。

長い歴史を持つ学術研究集団の一員として放射線の生体影響解明に取り組んで得た知識や、さまざまな考え方を持つ研究者と議論してきた経験は、私自身が一人の市民として福島原発事故で飛来した放射性物質による汚染に立ち向かう中で、納得できる最善の選択をするのに大いに役立ったと思っています。福島に向き合ってきた経験は同時に、正しい情報を伝える・知ることの大切さ、科学的な情報をもとに論理的に理解することの大切さを痛感するものでした。一緒にQ&A活動を続けてきたメンバーが、本書の執筆・編集を二つ返事で引き受けてくれたことは、「本当に伝えなければならないことを未来のために残すべきである」と誰もが感じていた結果であると思っています。

まえがきにもあるように、本書はそれぞれの地域で放射線に関して市民の相談を受ける立場の方々に向けた参考書と位置づけて編集しています。学術論文とは勝手の違う書籍の執筆・編集は、読み返すたびに不十分なところが見つかることの連続で、思った以上に手間取ってしまいましたが、私たちが真に科学的と判断した知見に基づく解説とQ&A、それに私たち

の活動から見てきたことを伝えるための座談会という三部構成は、「放射線リスクとどう向き合うか」ということを考える際に必ずや役に立つ内容であると自負しております。

最後になりますが、本書の出版を快く引き受けて下さり、ご尽力いただいた株式会社医療科学社の古屋敷信一社長ならびに幸村良吾様に心より感謝申し上げます。また、市民代表として座談会に参加下さった七海仁一様、馬目与市様、仮版の製本を支援いただいた公益財団法人「ひと・健康・未来研究財団」関係者の皆様、貴重な休日を使って用語集の抽出にご協力下さった茨城大学理学部の皆様、そして多くのコメントをお寄せいただいた日本放射線影響学会の諸先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

2014年12月

日本放射線影響学会 教育・研修委員会（編集代表）

田内 広